

2020 年度
入学試験問題 (1 期)

国 語

2020 年 1 月 31 日 (金)

解答を始める前に次の注意事項を十分に読みなさい。

受 験 上 の 注 意 事 項

1. 受験票と筆記用具以外は机の上に置いてはいけません。
2. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはいけません。
3. 不正行為と認められた場合には退席を命じることがあります。
4. 「開始」の合図で、問題用紙・解答用紙を点検し、解答用紙の受験番号・氏名欄に受験番号・氏名をはっきり書いてください。
5. 問題に関する質問は不明瞭な文字等の確認以外は応じません。
6. 問題冊子の余白部分や白紙のページは、自由に使用してかまいません。
7. 試験終了時まで退席することはできません。試験終了の合図と同時に、監督者の指示にしたがって解答用紙を通路側に置いてください。
8. 身体の具合が悪くなったときは、手を挙げて監督者に申し出てください。
9. 携帯電話を持っている人は電源を切ってください。これを時計として使用することはできません。
10. 問題冊子は持ち帰ってかまいません。

〔I〕

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、一部を省略した箇所がある。なお、行頭の数字は行番号を示している。)

1 一八七〇年代の日本で、福沢諭吉^{*1}の思想家としての獨創性は、国内の民主主義の必要と對外的な国の獨立の必要とをむすびつけ、まとめて理解することのできるような立場を發明したということに、あるだろうと思う。

5 国会開設を当面の目標として、国内の民主主義の必要を説いたのは、「民権」論者である。開国と共に、欧米先進国の政治制度についての知識は増し、またその政治思想の影響も漸く著しくなろうとしていたからである。^{*2}条約改正を当面の目標として、對外的な国の獨立の必要を説いたのは、「国権」論者である。植民地帝國主義国の外からのキョウイ^①を、その頃痛切に感じなかった日本人は、教育程度の高い層のなかでは、少^{すな}かったからである。

しかし^①「民権」論者のなかにも、また「国権」論者のなかにも、「民権」と「国権」との關係を福沢諭吉ほどはっきり見とおした者は少かった。

10 福沢が「民権」と「国権」の關係を、どう内面的に理解していたかは、一八七二―七六年に書かれ、後に『学問のすゝめ』としてまとめられた諸論文と、一八七五年に刊行された『文明論之概略』によって、充分に知ることができる。

『学問のすゝめ』には、二つの原理がある。

15 第一に人間の「平等」の原理。これは有名な「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」にあらわれている。そこから個人の「自由獨立」が正当化され、強調される。「獨立」は、殊に政治的な權力に対する「獨立」であるから、これはまた「民権」尊重の主張そのものだということもできるだろう。福沢自身はその「民権」尊重を、ただ政治的な「民権」の擴張の要求として具体化したばかりでなく、また政府の活動に対する民間の活動として言論・教育の面にも実行した。福沢が生涯を通じて一度も職を官に奉じなかったのはそのためである。『学問のすゝめ』のなかでも、福沢の職を官に奉ぜざるの弁は、官尊民卑^②のフウチョウ^③のはき氣を催すような明治社会において、夏目漱石の博士号拒絶の弁と共に、実にさわやかな精彩を放っている。

20 第二に、国家の平等、従って「獨立」の原理。これは「又自由獨立の事は人の一身に在るのみならず一国の上にもあることなり」ということばに、よくあらわれている。

そこで福沢は、この第二の原理と第一の原理との關係を、「一身獨立して一国獨立する事」と表現した。その内容は、主と

して二つである。「独立の氣力なき者は国を思ふこと深切ならず」——「独立の氣力」がないのと、「人民の權義」^{*3}がないとは、相伴うことである。人民に權義がなければ、責任もない。專制のもとでは、国が人民のものではないから、その人民に、国のため命を捧げることを期待することはできない。強兵を望めば、人民の權義をみとめなければならぬ。外に對して國權をまもるためには、国内に民權を伸長しなければならぬというのである。これが第一点である。第二点は、「内に居て獨立の地位を得ざる者は外に在て外国人に接するときも亦獨立の權義を伸ること能はず」ということ。世にいわゆる「一辺倒」の弊を排するということであろう。特定の外国を崇拜して獨立の氣風に乏しい傾向は、決して今にはじまったことではなく、明治初期にすでに、英學を修むる者が英國の風を尊び、獨逸の學を修むる者が獨逸の風に傾く弊害の指摘されていたことにもうかがわれる。そこで福沢は事の根源にさかのぼり、外国人に接しながら獨立の考えを保つためには、わが國人の獨立の氣風を、あらかじめ国内においても養つておかなければならぬ、と論じたのである。国内における個人の獨立は、国外に對する国の獨立と、その個人を介して関連するだろう。

しかし国内の「民權」伸長と對外的な「國權」伸長、個人の獨立と国の獨立が、福沢のいうように密接に関連しているとして、特定の場合には對立することがないだろうか。少くとも對立を予想したからこそ、「民權」論者と「國權」論者の争いも鋭くなつたはずである。そこで次の問題は、その二つの原理が對立する場合に、福沢がどちらの原理が優先すると考えたかということであろう。その決定的な答を『學問のすゝめ』のなかだけにもとめることはむずかしい。われわれは、どうしても『文明論之概略』を参照しなければならない。

『文明論之概略』もまた二つの原理をたてている。

その第一の原理は、「文明」の必要であり、第二の原理は、国の「獨立」である。「文明」は国内問題であり、「獨立」はいうまでもなく對外問題である。「文明」とは、人民の「智德の進歩」^{*4}である。

さてこのような第一の原理と第二の原理との關係は、ここでも、第二の原理（国の獨立）を実現するためには、第一の原理が必要な条件だということに帰する。その意味で、「獨立を保つ法は文明の外に求むべからず」であり、また「国の獨立は目的なり、國民の文明は此目的に達するの術なり」ということができるだろう。

ここまでのところは、外に對する「國權」の伸長という目的を達するためには国内における「民權」の伸長が必要だということ。『學問のすゝめ』の議論と、あきらかに重っている。

しかし『文明論之概略』は、他方で、こういうこともいっている。「人間智德の極度に至ては、其期する所、固より高遠に

して、一国独立等の細事に介々たる可からず。「文明」と「独立」とが対立するときに、優越するのは「文明」であつて、「独立」ではないというのである。これは、「独立」が目的であつて、その目的を達成する手段が「文明」だというまへの議論と、一見矛盾するようにみえる。福沢はその辺のところを、どう折り合せていたのであろうか。

50

『文明論之概略』には、福沢の答がはつきりと出ている。まずそれをみて、その答に照らして『学問のすゝめ』をあらためて読みなおし、あわせて一八七〇年代の福沢の思想の構造を要約すれば、およそ次のようになるだろうと思う。

第一、原則的（一般的）には、個人の自由独立、人民の智徳の進歩、——「民権」の伸長と国内の民主主義を支える価値は、国境を超越し、従つて対外的な国の独立、「国権」の伸長ということに優越する。

55

第二、一八七〇年代の日本がおかれている国際的状況は、権力政治のカチユウそのものである。「国と国との交際に至ては、唯二条あるのみ。云く、平時は物を売買して互に利を争ひ、事あれば武器を以て相殺すなり」。こういう国際関係に、「一視同仁四海兄弟の大義」の原則を以て臨むことはできない。殊に「日本の文明は西洋の文明よりも後れたる」条件のもとで、——つまり力関係の著しい劣勢のもとでは、「独立」の「事の急なる文化を顧るに遑あらず」である。なぜなら「先づ日本の国と日本の人民とを存してこそ、然る後に爰に文明の事をも語る」ことができるからだ。従つて、

第三、實際的（特殊状況的）には、対外的な「独立」を当面の目的とせざるをえない。国内の「民権」伸長と「文明」の開発は、その目的を達するための手段ということになる。

60

明治社会において支配的であつた考え方は、「国権」伸長に無限に傾いてゆくことのできる實際主義であつた。福沢にとつては、個人の自由独立、人および国の平等、文明の進展は、原則として国家に超越し、国の独立にさえも先行する価値であつた。特殊な状況のもとで、「事の急なる」場合にだけ、国の独立を第一の目標にかかげることもやむをえない、と福沢は考えたのである。

65

それならばなぜ福沢論吉だけが、個人の自由独立を抜くべからざる価値として説き、人の人としての平等を唱えてゆずらず、そこから発して各国の平等と独立の権義にまでその考えを及ぼしたのであるうか。福沢だけではなかったにしても、他ならぬ福沢その人において、個人の独立と国家の独立とのためにもっとも一貫した主張が、形成されたのはなぜであろうか。独特の経験がなければ、独創的な思想はない。福沢はそもそものどういう経験から出発したのであろうか。

『福翁自伝』によれば、「福沢論吉の父は豊前中津奥平藩の士族」であつた。中津藩は小藩である。「父の身分はヤット藩主に定式の謁見が出来る」と云ふのですから足軽よりは数等宜しいけれども士族中の下級」である。論吉は小藩の下級士族の末子

であつた。そういう条件のもとで、徳川身分社会の枠の崩れぬかぎり、少年が将来に大した望みをかけることはできない。だからその父は諭吉を坊主にしようと考えていたという。坊主ならば、「魚屋の息子が大僧正になった」という話もなくはなかったからである。福沢はその後実際に坊主にはならなかったけれども、『福翁自伝』のなかで往事を想出してこういふのである。「私は毎度此事を想出し、封建の門閥制度を憤ると共に、亡父の心事を察して独り泣くことがあります。私のために門閥制度は親の敵で御座る。」――

「門閥制度は親の敵」を裏返せば、人間の平等と自由独立の主張ということになる。福沢は西洋思想の影響を受けたから、個人の自由独立を唱えたものでは決してない。小藩の下級士族の末子が、その精神的・身体的能力にも拘らず、身分上の差別待遇をうけて、がまんならず、自由独立の要求の抑え難いものがあつたから、西洋思想の影響をうけたのである。もしそうでなかったら、中津藩をたび出して長崎へ遊学もしなかったろうし、長崎を去って欧米の現地に赴きもしなかったらう。

下級士族の息子は福沢だけではなかった。況や、封建制度、身分制度の被害をしたかにうけたのは、福沢だけではなかった。だから福沢が踏まえていた個人的体験には一般性があり、従つてその体験から発した思想にも普遍性があつたのである。福沢はその一般的な体験を鋭く深くうけとつたのであり、その体験を思想化する能力を備えていたのだ。能力の内容は、主として、儒学的な教育を通じて訓練された頭脳と、英学を通して知つた西洋思想の知識である。とにかく個人の独立の思想は、福沢にとつては、親の敵のように、抜きさしならぬものとして成立した。

福沢は明治維新のまえに三度外国へ行った。一八六〇年と六七年に米国へそれぞれ五カ月ばかり、六二年から欧州各国へ一年ばかり。これが当時の日本人にとって、例の少い経験であつたことはいふまでもない。その経験は、おそらく二つのことを意味したろうと思われる。

第一には、『文明論之概略』が語る「文明」の実際を見たということ、また「民権」の伸長の、実際に伸長された結果を、単に書物の上だけではなく実地に見聞したということ。

第二には、その「文明」国がアジアにあらわれるとき、いかなる暴逆が行われるか、植民地帝国主義のインドや中国における実態を見聞したということである。後者は当然日本国の独立がどれほど必要かということの痛切な実感につながつたはずである。当時植民地帝国主義の外からのキョウイを感じたのは、福沢だけではなかった。だから国の独立を強調する福沢の議論は孤立しなかつた。しかしインドや中国における西洋帝国主義の実際を見た者は少かつた。⑤といふことは、福沢が、その時代の日本人に一般的な問題を、より広く、より直接に、経験したということである。だから同時代人に向つて拔群の説得力をもつ

て訴えることができたのである。国の独立も、経験を通して、福沢の思想のもう一本の抜く可からざる柱③となった。

(加藤周一「福沢論吉と『文明論之概略』」より)

*1 福沢論吉……明治時代の思想家・教育家。豊前中津藩士の子。幕府の使節に随行して三回欧米に渡る。維新後は明治政府に仕えずに民間で活動した。後で述べられる『学問のすゝめ』『文明論之概略』『福翁自伝』は彼が書いたもの。

*2 条約改正……幕府が欧米諸国と結んだ不平等条約の改正を指す。治外法権を撤廃し関税自主権を回復することを目指していた。

*3 権義……権利と義務。

*4 智徳の進歩……「智徳」は知恵と徳行の意味。筆者はここで「智徳の進歩」を「文明」と同じものだと言い換えている。

*5 人間智徳の極度に至ては、其期する所、固より高遠にして、一国独立等の細事に介々たる可からず……ここでは「人間の智徳（文明）の極致は気高くすぐれたもので、一国の独立ですら細事と見なされるほどに超越的なものである」ということを述べている。

*6 一視同仁四海兄弟……世の中の子供のすべての人にわけ隔てなく仁愛を施して兄弟のように親しみあうこと。

*7 『福翁自伝』……福沢論吉の自伝。「福翁」とは福沢自身のこと。

*8 豊前中津奥平藩……現在の太宰府にあった藩。

*9 門閥制度……家柄によって身分が固定的に決められてしまう社会のあり方。

問1 二重傍線部①～③のカタカナを漢字に直しなさい。

① キヨウイ ② フウチヨウ ③ カチユウ

問2 波線部④～⑤の本文中での意味を答えなさい。

問3

傍線部①「『民権』論者のなかにも、また『国権』論者のなかにも、『民権』と『国権』との関係を福沢諭吉ほどはつきり見とおした者は少かった」とあるが、福沢は『学問のすゝめ』の中で「『民権』と『国権』との関係」をどのように考えていたか。その説明として最も適切なものをア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア「民権」と「国権」とはそれぞれに重要なものであり、政府は「民権」を伸長させるための政策を進める一方で「国権」を守るための軍備増強にも努めなければならないと考えていた。

イ国内において「民権」を浸透させれば、外国に対して独立した「国権」を守ろうとする気持ちの人々が持つことになるので、「民権」の伸長が「国権」の強化につながると考えていた。

ウ「民権」が強まるとその分「国権」が弱められてしまうので、「国権」を強化するという大きな目的のために「民権」が制限されたり侵害されたりする場合もあると考えていた。

エ平時には政府が「民権」の伸長を重視するのが望ましいことであるが、国家間の争いが生じた場合には「民権」よりも「国権」を優先させなければならないと考えていた。

オ「国権」と「民権」とは有機的に結びついているものなので、「民権」を伸長させるという最終的な目標を達成させるために、まず「国権」を強化させなければならないと考えていた。

問4

傍線部②「『一辺倒』の弊を排する」とはどういうことか。本文の内容に即して四十字以内で説明しなさい。（句読点等も字数に含める。）

問5

傍線部③「福沢はその辺のところを、どう折り合せていたのであろうか」とあるが、この問いに対する筆者の説明として最も適切なものをア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 文明や民権を伸長させることには絶対的な価値があり、明治維新後の日本に民主主義を定着させるという根本的な立場はゆるがせにできないことなので、国家の独立に優先して民権の伸長を図るべきだと福沢は考えていた。

イ 不平等条約の改正という当面の目標を達成するためには、日本が欧米並みに文明や民権が浸透した近代国家になったことを交渉相手に示すことが効果的であり、文明や民権の伸長が日本国家の独立につながると福沢は考えていた。

ウ 欧米先進国が日本を植民地にすることをねらって市場の開放を強要してくる実情を踏まえると、日本の緊急課題としてまず国家の独立を優先して実現させ、文明の進歩や民権の伸長は後回しにするべきだと福沢は考えていた。

エ 文明の発展や民主主義の伸長を唱えることは理想論であって、自由民権運動が国家の発展や政策の実施を妨げている現実に照らして省みると、かつて文明や民権の伸長を主張していた自説は誤りであったと福沢は考えていた。

オ 本来は国権よりも文明や民権の伸長を目指すべきであるが、国家間で利益を争い、武力によって圧力をかけてくる国際情勢の中では、後進国の日本が国家の独立や国権を優先させるのしかたがないことだと福沢は考えていた。

問6

傍線部④「福沢はそもそもどういう経験から出発したのであろうか」とあるが、福沢の「出発」に当たる「経験」がどのようなものであったか、六十字以内で説明しなさい。（句読点等も字数に含める。）

問7

傍線部⑤「ということは、福沢が、その時代の日本人に一般的な問題を、より広く、より直接に、経験したということである」とあるが、これはどういうことを述べているのか。その説明として最も適切なものをア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 福沢が唱える民主主義が当時の日本人の共感を呼んで世論を動かしたのは、人間の一生の身分が各自の出自によって生まれながらに決められてしまう門閥制度に対して、多くの人々が福沢と同じような不満を抱いていたためであったということ。

イ 福沢は西欧社会の実状を見聞したことによって民主主義の必要性を説き、またインドや中国の実態を見たことで日本が植民地にされる危うさを説いたが、それぞれの論が彼の直接の体験に基づいていたために多くの人々を説得できたということ。

ウ 福沢の主張が明治時代の多くの人々に支持されたのは、日本人が後進国としての危機感を抱いていた中で、福沢が西欧の文明を実地に体験した者として、先進の制度を導入する役割を果たしてくれることが期待されたためであったということ。

エ 福沢が洋行を通して植民地化されたインドや中国の状況を実際に見たことは、西欧列強の帝国主義によって日本が侵されるのを防ぐことが喫緊の課題だと感じていた当時の多くの人々の意識に通じる体験として、意義深いものであったということ。

オ 福沢は『文明論之概略』を著した後で西欧の實際を確かめるために視察に出かけたが、それは当時においては希少な体験であり、彼が持ち帰った広範で先進的な知識が多くの人々に活用され、日本の近代化を推し進めることになったということ。

問8

本文の論理の展開のしかたと内容について説明したものとして最も適切なものをア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア この文章では、1～2行目で「国内の民主主義」と「対外的な国の独立」という対立的な項目が挙げられ、さらにそれぞれが「民権」（3行目）と「国権」（5行目）という言葉に置き換えられて、両者の関係が論じられている。その後、もう一つの対立項が加わるため、51行目以降では「第一」「第二」「第三」という三つの項目立てがされ、三者の優劣が述べられている。

イ この文章の11～63行目までで、筆者は福沢諭吉の『学問のすゝめ』と『文明論之概略』の二つの著作を引用しながら、民主主義や日本の独立に関する福沢の思想について論じている。そのうえで、さらに68行目以降では、福沢の思想が抜群の説得力をもって多くの同時代人に受け入れられたのは、彼の生い立ちや希少な経験にあったのだという筆者の考えが述べられている。

ウ 21～22行目で「その内容は、主として二つである」と二つの内容を述べることを予告し、25行目で「これが第一点である。第二点は」という表現で、一つ目の内容と二つ目の内容との区切りが明示されている。このように、本文では内容を二、三点に分けて説明する姿勢が徹底しており、どの形式段落でもいくつのことを述べるのかを予告した後で筆者の考えが明らかにされている。

エ この文章では、33行目の「特定の場合には対立することがないだろうか」や66行目の「一貫した主張が、形成されたのはなぜであろうか」のように筆者がみずから問いかける表現が散見される。これらは疑問文の形をとっているものの、実質的には筆者の仮説を提示したものであり、問いかけによって提示された仮説をその後で筆者が論証する、という形式で論が展開されている。

オ 41～42行目の「その意味で、『独立を保つの法は文明の外に求むべからず』であり、また『国の独立は目的なり、国民の文明は此目的に達するの術なり』ということができるだろう」という文は、福沢諭吉の著作の引用をそのまま結論として用いたものである。このように、本文は福沢の著作の内容を紹介することを目的として書かれており、筆者が自分の解釈を表す叙述は見られない。

〔Ⅱ〕

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、一部を省略した箇所がある。また、本文中に出てくる外国人の名は、すべてヨーロッパの芸術家で、後の*にまとめてある。)

私の考えでは、芸術というものは、ある時理論を学べば、あとは芸術家の個性にしたがつて創作すればよいというものでもなければ、どだいそんなことは、できないものだと思う。芸術家は、理論を習うよりまえに、幼い時、もつと根本的な体験をしており、そのあとで、いつか、ある芸術作品にシヨクハツされて、^①芸術家の魂を目覚めされ、そこでそれを手本にとり、理論を学びながら、最初の試みにとりかかるといふものだと思う。そうして、彼の成長とか円熟とかいふものは、根本的な体験につながる表現にだんだん迫ってゆくという順序を踏むのではないか。この最初の手本が何であるかは、その芸術家の一生を支配する。日本の芸術家にとつて、それがピカソかゴッホだったり、モーツァルトかヴァーグナーだったり、チエーホフかシェイクスピアだったりしたとしても、私に何も異議を訴える筋はない。ただ、そういう時、彼のもつと幼い時の根本的な体験と、西洋の大芸術との間の距離はずいぶん広いはずだろうから、後年それを埋めるのは並大抵のことではあるまいと、最近、気がついてきたのである。手本が低ければよかつたろうというのでもない。しかしベートーヴェンもシェイクスピアも、私たちのとはひどくちがつた文明の体系から生まれ、それと複雑にからみあつた芸術である。それは私たちにわからないとはいえないどころか、私たちに強烈に訴えかけ、^②私たちが心の底から揺すぶり、^③ミリョウしつくす力に満ちている。だが、わかるとか楽しめる、同感できるとかいうことと、^④創造の根源につながるということとは、微妙にからみあっているが、ちがう次元に属する。これを明らかにすることは、理論家にとつても研究家にとつても、そうして私たち芸術に関心のある文筆業者にとつても、いちばん大切な仕事に属するだろう。バッハ、モーツァルトとヴァーグナーをもつドイツ人音楽家、モンテヴェルディと民謡をもつイタリア人、^⑤リユリとドビュッシーをもつフランス人、チャイコフスキーともしかしたらその前にグリンカをもつたロシア人音楽家たち、^⑥これは彼らの幸福であり、ときには不幸かもしれない。こういう人びとがいたということが、のちにくる数世紀のそれぞれの国の芸術を決定づけるのだから。

どういう文化も、そういうことから逃れがたいのである。そうして、それは芸術家の創作ばかりでなく、街の人、市民の感受性の規制にまでおよんでゆく。ヨーロッパに行くごとに思うのだが、南欧の人びとはよく知らないから別としても、スカンジナビア、ドイツからオーストリア、スイス、オランダ、といった国々で、花瓶に生けてある花の束をみれば、それがどれもこれも、根本的には、十六世紀ネーデルランド画派の天才、ブリューゲル老のあの素晴らしい花の絵にそっくりの構成をもつ

ている。ブリュッゲルの花の絵は、後にくる絵画の流れに大きな影響をおよぼし、それにつづく十七、八世紀の画家たち、たとえば花瓶に生けた花束の絵をやたらとたくさん描いたホイスムたちの原型となったといってもよいのだろうし、この種の絵は各都市の美術館に行けばいっぱいある。そうして、現代のヨーロッパ人たちが、まるつきり、こういう絵を見ないで育ったというのは考えられないことだ。ただ、彼らが今花を生けるとしても、そういう絵を思い出してするかどうかは疑わしい。

X、そうであるにせよ、そうでないにせよ、彼らは花を生けるとなったら、この四百年前のブリュッゲルから少なくとも二百年前までレンメンと伝わった絵画の伝統にみられる生け方をしてしまふのである。私は、こういった例をほかにも数多くあげることができる。しかし、もっと手近の例でいえば、逆に、私たちの国では、有名な料亭はもちろん、ちよつとした郊外の小料理店の片隅をみても、花が生けてあるが、そのスタイルは、ヨーロッパのものとは断然ちがう審美感と原理によつてゐる。私はこの何世紀も伝わってきたにちがいない日本の生け花の原型がどこにあるか知らない。しかしそれが変貌して二十世紀中葉の日本の草月流にいたる間の生け花をみても、それはブリュッゲル派の華麗にして重層的な生け方とはまるでちがう。

Y それは、少ない材料を巧みに配して、花と茎で輪郭づけてはいるが、本来はその花たちと同じくらい、それがとりのこし、埋め残した空間の拡がりを楽しむためにあるように見られる。もしそれを詩と呼ぶなら、この詩は、

Z ために、僅かな言葉を使って組み立てられた詩である。日本人がこれ以外の花の生け方ができないというのではない。日本人なら、いわゆる心得のない人が自己流でやつても、こういう生け方に導かれ、それをみる場合も楽しむことを知っているといつていいのである。そうして、これは、ある時、日本の自然の《草の根》を熟視して扱っているうちに、その本質を見抜いた人の手で芸術として純粋化させられて、一つの典型に達し、その後の何世紀にわたる私たち日本人の花の生け方に関する根本的なものを規定し支配しつづけているということを示している、といいたいのである。

一つの文化の生命というのは、こういう形で持続する。私たちの生活と思考法には、いまでも、そういう実例が無数にあるにちがいない。それが日本の文化である。私たちのあるものは、そのうちのあるものに不満であり、それから抜けだし、それと戦い、もつと別のものに到達したいと望む。当然のことである。何ものも完全ではないのだから。だが、その自己革命を西洋のモデルに従つてやるのは、くり返すが、容易なことではない。私も西洋のもので好きなものがたくさんある。だが、好きなものの好きな所以が、だんだんわかるにつけて、ますます、それを私たちが自分のものにするのはむずかしいと考えないわけにはゆかない。それには、自分を根本的に検討し、再組織する必要があるだろう。明治維新は日本の歴史の中で、最も大

がかりにそういう事業を行なつた最近の例である。そうして私たちは、今もなお、百年前にチャクシユしたこの大事業の継続のカテイの中にいる。

西洋に行つてみて、花の生け方と同じくらい、私にはつきり見えることの一つは、西洋のいろいろな国の人びとが、自分たちの歴史について、その中からある選択をして、私たちの国はこういうものであると考え、それを自分たちの生活を支え動かしてゆく情熱と理想の根本としている点である。彼らの歴史というものも、拾えば、それと矛盾する事実がいろいろと出てくるだろうに、彼らはその中から、選択をして、自分たちとその歴史を語り、将来を形づくる目標とする。

そういう態度をみていると、私は本居宣長を思い出さずにいられない。宣長も数多くの日本の中から、あるものをとりだし、それを日本だといひ、それに矛盾するものを斥けたものではなかつたろうか。それはまた、数多くの日本の可能性の中から将来に向かつての選択をしたということになる。千年の歴史をもっている以上、日本は一つであつて、かつ、一つではないはずである。その中のどういふものが、いつはじまつて、現在の日本の根幹をつくつてきているかを見分けるのは学者の仕事であると同時に、私たちの今の生活の意味でもあるだろう。

(吉田秀和『ソロモンの歌』より)

*この文章中に、ヨーロッパの芸術家として次の名がある。

◇画家——ピカソ、ゴッホ、ブリュッセル、ホイスム。

◇音楽家——モーツァルト、ヴァーグナー、ベートーヴェン、バッハ、モンテヴェルディ、リュリ、ドビュッシー、チャイコフスキー、グリンカ。

◇作家——チエーホフ。

◇劇作家——シェイクスピア。

*草月流——現代華道の一流派で、創始者は勅使河原蒼風。個性を尊重して造形的な生け花創造をめざす。

問1 二重傍線部①②③④⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

① ショクハツ

② ミリヨウ

③ レンメン

④ チャクシユ

⑤ カテイ

問2 波線部⑥⑦の本文中での意味を答えなさい。

問3 空欄部

X

・

Y

 に入る言葉として最も適切なものをア～オから一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア しかも イ もちろん ウ むしろ エ ところが オ ただし

問4 傍線部①「創造の根源につながる」とは、日本の芸術家が西洋のすぐれた芸術作品に出会ってどうすることをいうのか。

最も適切なものをア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア すぐれた作品を創造した西洋の芸術家について、その幼時にどんな根本的体験があったかを調べること。

イ 西洋の芸術作品から大きな感動を受けることで、自分の芸術家としての魂を目覚めさせられること。

ウ 西洋の芸術創造のもとをなしている文明の体系に、日本のそれとの違いを超えて立脚すること。

エ 自分と同じ幼時の根本的体験をもつ芸術家の作品を、自国の芸術を創造するための手本にすること。

オ 西洋の芸術について理解し同感するだけでなく、日本の芸術との相違点まで明らかにすること。

問5 傍線部②「これは彼らの幸福であり、ときには不幸かもしれない」というのはなぜか。その理由を、何が幸福で何が不

幸かがわかるように、四十字以内で説明しなさい。(句読点等も字数に含める。)

問6 傍線部③「そのスタイルは、ヨーロッパのものとは断然ちがう審美感と原理によっている」について、次のⅠ・Ⅱの間

いに答えなさい。

Ⅰ ヨーロッパとは異なる審美感と原理によるスタイルとはどのようなものか。解答欄に合う形で、四十字以内で説明しなさい。(句読点等も字数に含める。)

Ⅱ 空欄部 Z

には、このスタイルにおいて大切だと考えられることを、詩の場合にたとえて表した言葉が入る。その言葉として最も適切なものをア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア むだを省いて対象の中心が何かを描き出す

イ 語られず、語られないものの存在を暗示する

ウ すべてを言いつくさず、あいまいにしておく

エ 言葉に頼らず感覚だけで対象をとらえようとする

オ 言葉にならないところは捨てて明確化する

問7

傍線部④「その自己革命を西洋のモデルに従ってやるのは、くり返すが、容易なことではない」とあるが、筆者はその原因は文化を生み出す文明の体系が違うことにあると考えている。そのような筆者の認識は、どうすることの難しさを悟ったことがきっかけとなって得られたものか。第一段落（「私の考えでは、決定づけるのだから。」）の中の言葉を用いて、「ことの難しさ」に続くように、二十五字以内で説明しなさい。（句読点等も字数に含める。）

問8

傍線部⑤「自分を根本的に検討し、再組織する」とは、私たちが西洋文化に接する際に必要なあり方を述べたものであるが、それが必要とされる理由やその意味がわかるように、本文全体を通して筆者が言おうとしていることを、百二十字以内で説明しなさい。（句読点等も字数に含める。）

問
2

あ

⑤

⑤

問
3

X

Y

問
4

問
5

問
6

I

II

問
7

問
8

問1
〔1〕 (各2点) (i)脅威 (ii)風潮 (iii)渦中 問2
(各2点) (あ) したいに。だんだんと。

(い) 生き生きとした雰囲気にあふれている。 (う) 除外できない。 問3
(4点) イ

問4 (6点) (例) 特定の外国を崇拝して傾倒する気持ちを退け、自国の独立した考えを保つこと。(36字)	問5 (4点) 才
---	-------------------------

問6 (例) 小藩の下級士族の末子として生まれたために、徳川身分社会では能力があっても将来に望みをかけることができなかった

(9点) という経験。(60字)

問7 (4点) 工 問8 (4点) イ

問1
〔Ⅱ〕 (各2点) (i)触発 (ii)魅了 (iii)連綿 (iv)着手 (v)過程

問2
(各2点) (あ) 同類の中で最もその特徴を表しているもの。 (い) 理由。わけ。 (う) つじつまが合わない。

問3 (各2点) (X)エ (Y) ウ 問4 (3点) ウ

問5
(8点) (例) 創造のための優れた手本に恵まれた一方、いつまでもその影響から抜け出せないから。(39字)

問6 (1) (6点) (例) 少ない材料を巧みに配し、生けた花と、花・茎の埋め残した空間の広がりを楽しむ(スタイル。) (37字)

(II)
(3点) イ

問7
(5点) (例) 幼時の根本的な体験と西洋の大芸術との距離を埋める (ことの難しさ。) (24字)

問8
(12点)

(例) 日本と西洋では芸術創造の根源である文明の体系が違い、文化の形成においても固有の伝統が影響し、人々の生活や思考法まで

規制している。日本文化の将来を考える場合には、歴史を顧みて現在の日本の根幹をつくってきたものを見分けることが大切である。

(117字)

受験番号	氏 名

合計点
